

豊明希望チャペル礼拝

2026/9/13

「この方はどういうお方」

ルカの福音書 8 : 19～25

今日は、イエス様が、舟でガリラヤ湖に出て、そこで起こった嵐、突風にあおられ、今にも沈もうとしていたとき、弟子達の恐れ、叫び、そして、それと対照的



な、舟の中で悠然と眠るイエス様、そして、嵐を静めたイエス様、この印象的な場面から教えられていきたいと思います。

その前に、イエス様のご家族がイエス様のところに來た記事が入りますが、ルカの福音書では、他の福音書に比べて、もっとも短く触れます。私たちも、そのことは最後に少し触れるように致しましょう。

さて、ガリラヤ湖は、南北に 21 キロ、東西に 13 キロの比較的大きな湖です。海拔マイナス 200 メートルもある特殊な地形で、山から吹き下ろす突風が突然吹く、そういう土地でした。この後のところに出てきますが、イエス様は、西から東へ、ゲラサ（ゲルゲサ）の地へ渡るために、舟を出されます。10 キロ以上の距離があります。皆さんは、近いですから琵琶湖に行かれた方も多いのではないでしょうか。私も、数年前に、牧師会の修養会で訪れ、はじめて、琵琶湖のほとりに泊まって、静かな時を過ごしました。その日は静かで、海と違って、湖は、静かなときには、波もそれほどなく、水際まで近づける穏やかさがあります。しかし、数年後（昨年）、韓国の先生たちと琵琶湖に行ったときには、風が吹いて、そこに立ち止まるのが恐ろしいほどに荒れ狂っておりました。前に、静かな琵琶湖で、ゲラサに行かれたイエス様のことを瞑想（めいそう）、黙想していましたよとお話したことがあったかも知れませんが、その日は、同じ琵琶湖とは思えない、それは、確かに・・恐ろしいと感じる景色でした。この頃は、



各地で台風と、水害の被害が相次いでおりますから、状況は違いますが、水の恐ろしさといえますか、そうしたものの恐怖は容易に想像出来ると思います。

イエス様が出ようと思った時、湖は静かでした（←静かな時のガリラヤ湖）。しかし、天気は一変しました。突然の嵐となったのです。

御言葉を読みましょう。

「8:22 ある日のことであった。イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り、「湖の向こう岸へ渡ろう」と言われたので、弟子たちは舟を出した。8:23 舟で渡っている間に、イエスは眠り始められた。ところが突風が湖に吹きおろして来たので、彼らは水をかぶって危険になった。」



いくつかの疑問があります。一つは、「突風」とはありますが、字の通りの突然の嵐ではないはずです。少なくとも、陸の大工で、海での漁の経験がないイエス様はともかく、弟子達の多くは漁師で、毎日このガリラヤ湖で漁をする漁師ですから、ある程度は彼らが予想できました。突風の吹く時間帯はある程度決まっていた。昼間は湖から陸に向かって風が吹き、夜間は

湖水の温度が下がることで、山から湖に風が吹き下ろしてきます。ここで、イエス様が主導権をもって、舟を出されたように書いてあります。弟子達は、先生、突風の吹く時間帯です。止めておきましょうと言わなかったのでしょうか。書いてありませんが、言ったかも知れません。「私たちは漁師です。今は、ガリラヤ湖に舟をだしてはならない時間です。」と。であれば、それでも、イエス様は、わかっていて、舟を出されたと言うことです。また、弟子達に言われなかったとしても、天地万物の創造者でもある神であるイエス様は、予想するのは容易であったと言えるのではないのでしょうか。であれば、嵐を予想してなお、あえて舟を出されたか、もしくは、予想をする必要がないと考えられて、言い方に気を付けねばなりません。何も考えないで舟を出されたと言うことでしょうか。何も考えないと言うことはない・・目的はありました。対岸のゲラサの地に行くためです。そこは異邦人の地です。あえて行かなければ、ふらっと行くところではありません。事実、このあと、悪霊につかれた人の癒やしが行われ、豚に悪霊が移って、大きな印象を、その地に残すことになります。

この箇所から、多くの牧師が語り、皆さんも様々な思いをもって読み、聞かれてきたことと思います。ここまでで思うことなのですが・・強い使命があったからこそ、あるいは、強い信仰があったからこそ、嵐でも渡れる・・そういうことなのではないかということです。

私も何度もここを黙想し、また、教えられてきて、最後に残るのは、やはり、この箇所だと思うのです。そして、ルカもそのことを特に印象的に伝えているように考えるのです。それは。

「イエスは眠り始められた。」です。

そして、この態度は、弟子達の、ある意味で、いらいら、怒りを買うことになります。黙想しながら、次の聖句に進みましょう。最後まで読みます。

「8:24 そこで弟子たちは近寄ってイエスを起こし、「先生、先生、私たちは死

んでしまいます」と言った。イエスは起き上がり、風と荒波を叱りつけられた。すると静まり、風（なぎ）になった。8:25 イエスは彼らに対して、「あなたがたの信仰はどこにあるのですか」と言われた。弟子たちは驚き恐れて互いに言った。「お命じになると、風や水までが従うとは、いったいこの方はどういう方なのだろうか。」

「弟子たちは近寄ってイエスを起こし、「先生、先生、私たちは死んでしまいます」と言った。」

この箇所、このやりとりこそが、最も印象的で、ルカの、そして、イエス様のお伝えになっていることの中心のように、私たちは思うのです。二つのことを教えられたいのです。

一つは、これは、私たちの祈りを表しているということです。そして、私たちの祈りは、どう修正されなければならないかと言うことです。

いかがでしょうか。私たちは、時々、大きな課題をもってイエス様に祈ります。人生のまさに、嵐にあって、イエス様、イエス様起きて下さい！と叫ぶのです。せっかく休んでおられるイエス様。人間なら、遠慮して、こんな時間帯に、相手が眠っておられる時間に、ラインをしたら迷惑かな、電話して起こしたら怒るだろうな・・玄関の戸をたたいたら失礼だろうなと考えます。しかし、相手が神さまなら、どうせ寝ないんだから応えてくれると思ってでもいるのでしょうか。まあ、そうです。だから遠慮がありません。いきなり、揺すって起こすような暴挙に出るのです。それが、私たちの多くの場合の祈りです。まさか、まあ、神さまもお忙しいだろうから、今はゆっくりと休んで、明日にでも、お伝えしようなどと思いませんし、牧師も、そんな風に祈りなさいとは、まさか、教えません。

旧約の時代は違っていました。神さまに近づき、まして、願い事を伝えるなら、年に何度か、燔祭（はんさい）の日、素祭の日、皆と時間を合わせて、燔祭の動物を、あるいは、素祭の日の作物を用意して、感謝し、また、願い事を、お伝えしました。

今は、イエス様が、神殿の幕を破り、神さまを父と呼ぶ関係にして下さったので、それをする必要はなくなりました。ですから、私たちは、すぐにも、いつでも祈っていいのです。ただ、今朝、私たちは、このやりとりを見ていて、このすぐにも、いつでも祈っていい神さまとの関係が、大切なものを失わせていることに気づかないのでしょうか。それは、もし、これが、神殿の幕を破っていただいた神さま前に出ていても、相手が、神さまだと思っていなかったということです。

彼らは、奇蹟を見て、はじめて気づいたということです。

「お命じになると、風や水までが従うとは、いったいこの方はどういう方なのだろうか。」

これは、祈りではないですね。祈りのようで、少なくとも、相手が誰であるかを分かって祈ってないですね。祈って、その祈りがかなえられてはじめて、相手が

誰であるか気づく。ある意味で、これは、人間の現状ですし、そんな祈りを、ゆるしてくださる神の、恵みだとは思います。ただ、わたしたちは、いつまでも、このような祈りでいいかということです。少し極端な言い方をすれば、神さま、イエス様が眠っておられるのだから、大丈夫だと考えなかったのかということです。外は、嵐であっても、その嵐の中でイエス様が寝ておられるとしたら、心配はいらないということをなぜ悟らないかということです。イエス様は、彼らにこういわれます。

「あなたがたの信仰はどこにあるのですか」

いったい、彼らの信仰はどこにあるのでしょうか。小さな信仰はあります。漁師である彼らが、大工である人に、どうかしてくれと願っているからです。訴えているからです。少なくとも大工とは考えていません。しかし、神さまとは考えていないようです。どちらかという、指導者に対して、あなたが主導して舟を出したのだから、責任取りなさいよ！という訴えです。モーセに逆らって、エジプトに帰りたいと訴えた民のようです。私たちは反対したのに、どうなっても、あなたの責任ですよとの、責任転嫁であり、不信仰の訴えです。

私たちは、ふり返って、このような祈りをしていないか、気づかなければならないのかも知れません。

訴えるばかりで、相手が神さまである事を認めていない、そんな祈りをしていないかという事です。

「そんな祈り」とは、どんな祈りでしょう。それは、訴えていても、祈っていない、そんな祈りだということだと思います。

本当の祈りは、相手が誰であることを明確に理解して申し述べるものです。訴えは、相手が誰であろうと、聞いてくれれば誰であってもいいのです。人であろうと、神であろうと、仏であろうと、聞いてくれれば誰でもいい。そこには、神さまへの信頼はありません。

弟子達はどうすれば良かったのでしょうか。私は、「眠る」ことに、象徴的な意味を感じています。不安になったら、困難に遭ったら、まずは、安心して寝て下さい。体を休めてください。神さまにゆだねましょう。1 足す 1 は 2 のように明確な答えがなかったとしても、神さまは、私たちの想像を超えた答えを用意して下さる、漁師達が確実に予想できた定期的な突風さえも、吹き払って下さる。その信頼をもっていよう。だから、時には、感謝の祈り事すれ、願いの祈りは止めておこうと、決断するのも良いのかもしれない。

多くの時間を、このことに割きました。イエス様の母と兄弟がイエス様を心配して、イエス様が、律法学者たちから嫌われている、頭がおかしくなっているようだ心配もしているようだ、だから、イエス様を家に戻さなければならぬと考えていました。

「8:20 それでイエスに、「母上と兄弟方が、お会いしたいと外に立っておられ

ます」という知らせがあった。8:21 しかし、イエスはその人たちにこう答えられた。「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行う人たちのことです。」

ここまで教えられてきたことと、同じ事を考えたいのです。母や兄弟が来た理由は、人間イエスを心配する配慮でした。愛はありました。しかし、イエス様がキリストであって神であるという信頼はありません。

私たちを救い、神のことで下さって天国を保証して下さいの方は、天地万物を造られ、私をも創られた神です。今日教えられたことで、私たちは、今朝、相手が誰であるかを良く理解した祈り、信仰を持ちたいのです。

ある人が、祈りは何度も繰り返さない。ゆだねたから信じる、やめると言いました。それは、一つの信仰かも知れません。私は相手が神さまだから、祈りを止めない、かなえられるまであきらめないで祈り続けると言いました。それも一つの信仰です。しかし、いずれにしても、相手が天地万物の創造者である神さまである事を知っている者の祈りをしたいということです。

さて、この週。今週の歩み。信頼しているからこそ祈りを止める。信頼しているからこそ祈りを止めない。いずれにしても、私は、神さまを信頼している。神さまにすべてをゆだねる、完全に守られ、必ず導かれる歩みを、ここからはじめてまいりましょう。